

アンドレ・マルローにおける「武士道」

—異文化理解の視座から—

« Le Bushido » chez André MALRAUX

山崎 ゆき子

YAMAZAKI Yukiko

1. はじめに

アンドレ・マルロー(1901～1976)は、20世紀フランスを代表する作家の一人であり、その著作は小説作品を中心に、我が国においても多くの読者を獲得してきた。また、創作活動とともに、ド・ゴール大統領のもとで、初代文化大臣として文化の普及と発展に尽力したことでも知られている。

これら多様な活動に通底する特徴のひとつとして、古今東西のさまざまな文化・文明への関心と尊重を挙げることができるだろう。特に東洋については、『西欧の誘惑』(1926)、『征服者』(1928)、『王道』(1930)、『人間の条件』(1933)などの代表的な著作にみられるように、高い関心を示している。

日本へも公私を通じて4回(1931年、58年、60年、74年)訪れている。小説としては、『人間の条件』で扱われているのみだが、日本についての言及は、芸術論やエッセー、および、折に触れての発言などをおして随所でなされており、その関心の高さを見ることができる。関心の対象は、芸術、宗教にはじまり、日本文化・文明のさまざまな側面に及んでいるが、なかでも、『人間の条件』の主要登場人物、キヨの人物設定は示唆に富む。すなわち、彼は日本人の母をもち、8歳から17歳まで日本で教育を受けた、とされている。そして、物語のクライマックス部分、彼が自殺を遂げる場面で、以下のような記述がされている。

日本の教育を受けたために、彼[キヨ]は、自分らしい死によって、すなわち、自らの生にふさわしい死によって死ぬということが美しいと、常に考えていた。そしてただ単に死ぬということは受け身であるが、自ら命を絶つということは、行為である。¹

このキヨの死に対する考え方を記した部分は、マルローの日本における関心の所在とその特徴の一つを表していると思われる。では、彼は日本に関する考えの基本となる情報を、どこから得たのだろうか。日本に関心を抱き、さまざまな発言を行ったフランスを代表する作家が、その思想や知識の核となる情報をどこから得たか、ということ考察することは、当時の日本理解および日本に関する情報の状況を知る上でも有益であるだろう。

そこで、本稿では、マルローの日本観について、とくに、日本人における「死」、すなわち、切腹に象徴される「武士道」の精神性に焦点をあて、その理解と解釈から、彼の日本理解を読み解くとともに、そ

の知識の源泉となった情報を探りながら、当時のフランスにおける日本理解の一端を考えていくことにしたい。

2. 「武士道」にかかわる言説と思想的背景

マルローの著作において、日本に関してある程度イメージ可能な形での記述が最初にあらわれるのは、『征服者』(1928)においてである。そのうちの一つは、「日本ではドイツ人の講演者がニーチェの思想を説き始めると、熱狂した学生たちは岸壁の上から身を投げた。²」というエピソードである。そしてもう一つは、ある人物の死をめぐる以下のような会話である。

「(略)チェン・ダイはね、彼は、自分が大切にしているもののために自殺するのだ。わかるかい、他のすべてにもまして大切にしているもののためになのだ。それ以上のものだ。もしうまくやり遂げたら、それは、彼の人生でもっとも崇高な行為となるのだ。そうなのだ。だから、いろいろな方法がとれるというわけじゃない。(略)」「模範と同じことになるのか…」「(中略)君はね、模範というけどね。それはものすごく難しいことだよ！ いくらか日本人たちの場合が当てはまる。わかるかい？ でも、チェン・ダイの場合は、自分自身にふさわしくあるために自殺するのではない。また、(中略)英雄的に生きるためでもない。チェン・ダイは、自分自身の使命にふさわしくあるためなのだ。」³

日本についてある程度のイメージができる記述は、この作品では上記 2 箇所しかない。日本についての彼の最初の記述のどちらもが、日本人の自殺であるという点は、示唆に富む。また、後者の引用の会話で日本を例としてイメージされているのは、日本人における死の流儀、すなわち、切腹である。この点は、注目に値するだろう。

さらに 1931 年、最初の訪日の際には、友人であり通訳を務めた小松清によれば、到着直後の新聞記者インタビューで、日本について日頃から考えていることを問われ、彼が挙げたのが、「ハラキリ」であった。「私は、ずっと以前から、日本人の《ハラキリ》について、いろいろ考えてきた⁴」と発言し、その場に行った記者たちの口元に皮肉な笑いが浮かんだ、と小松は回想している。マルローは、その際に、「ハラキリ」を「人間における最も《神聖なもの》⁵」と表現し、次のように続けて、自らの考えを述べている。少し長くなるが、引用してみよう。

ハラキリを私は哲学的に考える。(中略)私の考え方を、かんたん直截に言っただけならば、日本人のハラキリは—《死すること》であって、決して《死ぬこと》ではない。繰り返して言おう—死することであって、死ぬことではない。言いかえると、ハラキリにおいて、《死》は消滅する。死という人間的条件を、ある人間の意思が、自由に否定する行為であるからだ。ハラキリにおいては、より高き倫理価値が、自己にたいする超越のかたちによって、死に対する克服のかたちによって肯定されているからである。人間として生きようとするために—一人間のディグニチや自由や愛をまもるため、その他いろいろんな場合があるだろう—自分の生命を絶つ、ということは、まさしく《より高い価値》を肯定するための行為としてうけとらねばならない。⁶

ここにおいて、「ハラキリ」すなわち切腹は、単なる死ではなく、「死に対する克服」「自己にたいする超越」という形でとらえられ、人間の意志によって「死」という人間の条件を否定し、「《より高い価値》を肯定するための行為」として、特別な意味が与えられている。そしてこの訪日後に執筆されるのが、先に挙げた『人間の条件』である。したがって、主要登場人物キヨの死に関する考え方は、マルローの日本における関心の所在という点において、きわめて重要な位置を占める、ということは明白であろう。

この後、日本についての言及は、小説作品においては見ることはできない。しかし、1937年に、彼は小松に日本のファシズムの特徴について、次のように語っている。

日本のファシズムには、他の国のファシズムに感じられない《デザンテレッセ》なもの、つまり利害関係の因果を超えた神話ミスチック的なものの面がある。日本のファシズムがたんに富の獲得ということのためにだけ支配されていると思うのは—ヨーロッパでは、そう考えがちだが—誤っている。サムライ精神とか、武士道といったものが、頭から封建時代の遺物として骨董品扱いをうけているが、こうした考えは少し素朴すぎる。遺物であろうがなかろうが、それは生きたミスとしてまたモラルとして今日の日本人の心のなかに呼吸しているからだ。大きな力をもった伝統として生きている事実は否定できない。(略)民衆の場合についていうと、いま言ったようなミスなりモラルの働きは、或いは潜在的であって、はっきりした意識的なものではないかもしれぬ。恐らく、そうだろう。⁷

日本のファシズムには利害を超えた側面があり、その特殊性は、「サムライ精神」「武士道」に起因するものである、とする。そして、「切腹」に象徴されるこの精神は、意識されなくなっているが、日本人のモラルとして深く内面化され、個人の利害を超えた行動を生み出している、と考えており、ファシズムのみならず、日本人の特殊性を形成するものととらえられている。

3 回目の訪日時(1960)に行った演説では、日本を「武士道の民」と表現し、「愛の感情、勇気の感情、死の感情」において中国とは異なる、と述べている⁸。さらに、1970年、三島由紀夫の割腹自殺について、彼は次のように語っている。

ともかく、日本的自決ということには、はかり知れない大問題が秘められているのです……。いかなる文明も死というものをエリートの与件として問題化したことは他にないからです。ある流儀によって、これを問題化したものこそは日本の武士道であった。(中略)《死》なるものが全く存在しないような一個の文明の総体に遭遇したとしても、なんとそれは当然のことであろうか！だれもが、そこでは、子供のころから、自分の自害すべき瞬間を選ばなければならないと知っているような文明と遭遇することは……⁹

この時点においても、日本の特徴として「切腹」という死の流儀に言及し、それによって「死」を否定したと語っている。すなわち、1930年代からマルローの日本観の中心を占めていた切腹と武士道の精神性への関心が晩年に至っても変わっておらず、かつ、人間の条件である「死」を否定する行為という、こ

の解釈が一貫していることを見ることができるのである。

そして、最晩年、1974年の最後の訪日後に執筆された著作において、2回目の訪日時(1958)に初めて鑑賞して以来、日本の最高傑作として称賛してきた「伝・平重盛像」について、次のように記している。

そこに表された至高の表現とは、素晴らしい黒の平面と顔を表す記号との関係ではなく、儀式的腹切りなのである。それを、孝信は実にうまく示唆しているのである。¹⁰

このようにして見てくると、マルローの日本における関心の所在は、青年期から最晩年に到るまで、一貫して「切腹」とそれを象徴とする「武士道」精神にあるということは、明らかであるだろう。そしてまた、その解釈についても、大きな変化は見られない。すなわち、「死」を克服し、ひいては否定するための意志的行為、人間が決して逃れることのできない「死」という運命から人間を解放する行為としての「切腹」、そしてその「儀式としての死」という流儀を作り上げた「武士道」精神、という解釈である。

では、マルローはなぜ、このような解釈をしたのであろうか。マルローは、祖父や父の自殺をすでに体験し¹¹、現実において、「死」について青年期から考えをめぐらせる状況にいた、という事実を、第一に挙げることができる。しかし、それを超えて、彼に「切腹」や「武士道」に関心を抱かせた思想的背景は、何だったのだろうか。彼の発言や記述から考えてみよう。

先に引用した1回目訪日時のインタビューで、彼は次のようにも語っている。

近代的な日本人にとって、過去の遺物となってしまったものが、私たち近代的なヨーロッパ人にとって、或いは大きな謎となったり、或いは深い暗示となって現れたりする、と私ははっきりと率直にいつておきたい。¹²

己の与える死によって、己を生かすこと！私は、このモラルにつよく惹きつけられてきたが、近代ヨーロッパの思想家や作家も私と同じように、このハラキリの問題、つまり自由意思による自己超越問題と取り組んでいるということをおきたい。しかも神を信じない人々として。こうした考え方のうちに、もっとも近代的なものがひそんでいる、ということも忘れてはならない。¹³

ここで言及されているのは、当時のヨーロッパの思想状況である。すなわち、「死」という避けられない運命から人間を解放し、答えを提示してくれていたのは、かつてはキリスト教だった。しかし、キリスト教の力は衰え、その救済に、ヨーロッパの人々、とくに第1次世界大戦を経験した当時の若い世代は懐疑的になってきた。と同時に、キリスト教が担ってくれていた「死」という問題が、改めて人々の前に立ち現れたのである。このようなヨーロッパ全体を覆っていた精神的危機について、彼は1927年「ヨーロッパのある青年層について」というエッセイですでに語っている¹⁴。そのような状況において、人間の意志によって「至高の価値」のために、自らに死を与えるということは、「死」を克服、言い換えるなら、否定するものであり、神が存在しない世界における「死」と人間の在り方について考えさせるものとして、彼の眼には映ったと言えるだろう。

『人間の条件』の登場人物、キリスト教徒であるとともにテロリストという設定のチェンに、「神もキリストもないのだとしたら、魂をどうすればいいのか¹⁵」と、マルローは言わせている。この言葉は、神やキリストを無邪気に信じるのが難しくなった、当時の多くの人々の気持ちを表現したものであるだろう。そしてこの言葉は、上に引用したマルローの言葉と呼応している。チェンの言葉はニーチェの「神は死んだ」という表現を念頭に置いたものであるが、マルローは、クララ・マルローの証言からも明らかなように、若いころからニーチェに傾倒しており¹⁶、チェンの言葉には彼自身の思いが表現されていると言えるだろう。さらに、上で言及されている「ヨーロッパの思想家や作家」を代表するのが、ニーチェであり、また、マルローがしばしば引き合いに出すベルナノスやドストエフスキーである¹⁷。そしてマルロー自身もそのうちの一人だったのである¹⁸。したがって、マルローがとらえる「切腹」と武士道精神は、当時のヨーロッパが直面していた精神的な危機が背景にあり、その危機を打開する新たな思想的糸口の模索、という観点から彼の関心を惹き、解釈されたものなのである。

さてそれでは、マルローは、そのような解釈の源となる切腹や武士道に関する知識を、どこから得ていたのだろうか。晩年になれば、日本人の知人も増え、そこから知識を得たという可能性はあるのだが、先述したように、彼の「切腹」「武士道」に関する解釈は、1920年代から基本的に大きな変化はない。そこで、次章では、20世紀前半を中心にして、その点について考察してみよう。

3. 「武士道」に関連する知識の源泉

このような情報源を考察する上で大きな手がかりとなるのは、一般に、日記や読書記録である。しかし、マルローはそのどちらも残していない。自らのプライベートな部分については、親しい者にも一切語っていないのである¹⁹。したがって、この作業は、彼の文章や発言に時折見られるものや、当時の状況や周囲の人々などの証言を中心に探る、という手法をとることになる。情報の源泉として、1) 社会一般に流布していた情報、2) 知人からの情報、3) 書物からの情報、の3種類に分けて考察していこう。

1) 社会に流布していた情報

20世紀初頭には、日本に関するどのような情報がフランスにもたらされていたのであろうか。それを知るには、当時刊行されていた挿絵新聞『イリュストラシオン²⁰』の記事が参考になるだろう。この新聞は、日本に関する記事を1847年から折に触れ報道している。20世紀初頭の記事を見ると、日本関連の報道は、軍事的な側面が中心になっている。この時期には、日露戦争の詳細な情報が次々と掲載されるが、そのなかの、1904年6月18日号に掲載された、「金州丸」に関する挿絵は注目に値する。この絵には下に「《金州丸》の英雄的な最期：船上でのハラキリ」というキャプションがついているだけである。他に何の説明も付されていない。それまでの切腹に関する記事には、「ハラキリ」という語が用いられる場合、何らかの形で「自らの腹を切り開く」や「自ら命を絶つ」という説明が加えられていた²¹。しかし、この挿絵には、そのような説明はない。このキャプションを見ると、「ハラキリ」という語が、すでに説明を必要としなくなっている、ということがわかる。また、「ハラキリ」とは「英雄的な最期」である、という見方をここに見ることができるのである。

一方、「武士」や「武士道」という語は、この挿絵新聞には出てこない。「サムライ」という語については、

1874年から75年にかけて連載された『ヒョットコ』というジャポニスム小説に登場している。

さて、20世紀前半には、1912年に、乃木希典が明治天皇崩御に伴い、殉死を遂げている。この出来事は、世界に大きな衝撃を与え、フランスでは一般の新聞でも大きく報じられている。たとえば、『ル・フィガロ』紙1912年9月14日号の扱いを見てみよう。第一面から二面にかけて、明治天皇の葬儀とともにこのニュースが伝えられている。その分量は双方で縦三欄半に及び、総量にして一紙面の半分を占めている。そしてさらに、その翌日9月15日号でも取り上げられている。乃木希典の殉死について、「ハラキリ」「サムライ」という語を交えながら、当日の詳細な状況に加えて、殉死について、当時の研究者ラ・マズリエール侯爵の文章の引用を中心に詳しい解説が付されている。また、この解説の中で「武士道」という用語が説明とともに用いられている。この記事は第一面中央に置かれ、縦一欄を超える分量である。二日に及ぶこの報道は、他と比べて破格の扱いとなっている。これほどの扱いを受けて報じられている以上、人々の話題に上ったことも想像に難くない。従って、このニュースによって、フランスの人々にとって、日本と「ハラキリ」はよりいっそう緊密に結びついたものとなっただろう。ただし、「武士道」という語も登場するが、「ハラキリ」とは異なり、解説付きであることには注意が必要であろう。

この出来事の衝撃は、その後も続いている。というのも、1931年、ガリマール出版から「著名人の生涯」シリーズの一冊として『乃木將軍の生涯』が出版されているからである。これは、出版社の依頼により、日本人を父に、フランス人を母に持つキク・ヤマタが執筆したものである。このことから、1930年代になっても、武士道の象徴として当時報道された、日露戦争の英雄乃木希典の殉死は、フランスの人々の心に強く残るものであったことがわかる。この著作の中で使用されている武士道関連の用語については、「サムライ」「ハラキリ」はフランス語の単語として、説明無しに用いられている。しかし、「武士道」という語については、用いられていない。そのかわりに、「サムライの規範²²」という表現が用いられている。

このような流れを見てくると、マルローが来日する頃のフランス社会では、日本について、なお、「サムライ」「ハラキリ」、とくに乃木希典によって体現された、それらのイメージがあったといえることができるだろう。

フランスでの辞書への語の記載は、このような状況を裏付けるものとなっている。1966年に刊行された、フランスのいわゆる大國語辞典『ル・ロベール』には、「サムライ」という項目があり、使用例として、ピエール・ロチの『お菊さん』(1888)の一節が引用されている。初出年は1885年となっている。「ハラキリ」についても項目があり、フランスにおいて用いられ始めたのは、1873年という記載がある。使用例としては、クロード・ファレールの『戦闘』(1909)の一節が挙げられている。また、もっとも一般に普及している国語辞典『ル・プチ・ロベール1』1977年版にも、同様の記載がある。さらに、1960年刊行の『ラルース大百科事典』には、「ハラキリ」の項目に、乃木希典の割腹自殺についての記載がある。したがって、20世紀前半には「ハラキリ」および「サムライ」という語は、フランス語としてすでに定着していることがわかる。また、「ハラキリ」は乃木の殉死と深く関連づけられている。

では、「武士道」という語は、どうなのであろうか。『ル・ロベール』(1966)にも『ル・プチ・ロベール1』(1977)にもこの語は記載されていない。1960年刊行の『ラルース大百科事典』では項目があり、解説が記載されている。また、その解説の中には「サムライ」が用いられている。

以上のことから、「ハラキリ」「サムライ」という語は、20世紀初頭にはすでに一般的に用いられるように

なっており、その内容も知られていたことがわかる。しかし、一方で、「武士道」という語は、1960年代になっても、フランス語として一般的に認知された語とは言い難く、特殊な用語であったことがわかる。

マルローは、1937年の小松清との会話で「武士道」という語を用いている。また、1960年に来日した際の講演でも使用しているが、この語の当時の普及状況を見ると、一般に流布していた情報以外からも情報を得ていたことが推測される。

2) 知人からの情報

さて次は、知人からの情報について考えてみよう。日本に関しての情報を彼に提供できる知人として考えられるのは、日本に詳しいフランス人、あるいは日本人であろう。日本に詳しいフランス人として、当時の状況を見てみると、何をおいても、ポール・クローデルを挙げなければならない。クローデルは、駐日フランス大使として、1921年から1927年まで日本に滞在している。また彼は、外交官としての任務をこなしながら、詩や戯曲、評論などを中心に数多くの著作を著しており、フランスの当時の文壇では重要な地位を占めている²³。日本についても『東方所観』(1900)所収の「アマテラス伝説」や、エッセー集『朝日の中の黒い鳥』(1927)を出版するとともに、『百扇帖』(1927)など日本文学に触発された作品もある。さらに、当時すでに文学界では主要な出版社となっていたガリマールの中心人物でもあり、文芸雑誌『新フランス評論』編集長ジャック・リヴィエールやジャン・ポーランと親しい間柄であった。

一方マルローは、1922年からジャック・リヴィエールと関わりを持ち『新フランス評論』にしばしば寄稿、1928年からガリマール出版部門の原稿審査委員、29年から美術部門にて美術作品集出版および展覧会開催担当をしている。さらに1933年には、マルローがクローデルの著作の編集を担当している²⁴。マルローはクローデルの戯曲を二十歳の頃から賞賛し、作品の一部を暗唱もできる程であった²⁵。したがって、状況から考えれば、マルローがクローデルと面識を持ち、日本に関する情報を直接得た可能性はある。しかし、クローデルの日記には、前述のジャック・リヴィエールやジャン・ポーランなどの友人の他、ジッド、モーリアック、マラルメなど多くの作家・批評家、その他、出会った人々の名は記載されている。その数はきわめて多数に上っている。しかし、マルローの名は一回限りしか出てこない²⁶。しかも、その記述は、マルローとの交流を記したものではない。レンブラントの絵画名の後に、かっこ書きで彼の名が記されているだけである。クローデルの日記のこのような記載内容から考えると、たとえ接点があったとしても、日本について語り合うということはなかったように思われる。

次に大きな可能性として考えられるのは、小松清である。しかし、初めて日本を訪れた際のインタビューでマルローが「ハラキリ」に言及したことについて、彼は次のように記している。

彼はこんなことを話しながら、心のなかでは或いは、いまここに彼の通訳をやっているこの僕のことを考えているのでなからうか、とさえ思った。ぼくは、いまだ彼から、自決についての彼の意見をきいたことはない。今日が、はじめてである。しかし、いつかパリで、ぼくが自殺しようとした、何度か自殺しようとしたことのあるのを彼に話したのを、彼はよく知っている筈である。²⁷

この記述によれば、マルローが「ハラキリ」に関心を抱いていたことを、小松もこのときに初めて知った、

ということになる。したがって、最初の訪日前に小松がマルローに、切腹やそれに関する情報を与えたということは、考えにくい。

では、訪日後はどのようなのだろうか。その点については、小松は次のように記している。

日本にいたあいだ、彼は私に、日本の武士における自殺(割腹)の場合を、しばしば語った。神戸の港に着いたその日、記者団との会見のとき、割腹について語っている。上陸第一歩の言葉であった。日本を知るまえから、日本的な自殺としての割腹は、彼の心につよく憑きまどって放れなかったであろう。これは《日本人についての一つの重要な^{イデオ}想念》として、かなり以前から彼の思索の世界に培われていたのだろう、と私には考えられる。²⁸

また、先に引用した、武士道と日本のファシズムの関連についてのマルローの言葉に対して、次のような感想を述べている。

しかし永遠の闘争者、黙示録の行動人とも呼ばれるマルローの精神や性格のうちに、武士的なものと相通ずる何ものかが、はげしく呼吸していることは否定できない。(中略)要は、封建制度という、ある時代の制度と、そこから生まれたある特殊な精神の価値を混同してはならぬことである。²⁹

このようなコメントから見えてくるのは、マルローの解釈に寄り添い、また、理解しようとする姿である。小松は、自らの見解や反論をマルローに語ってはいない。このように見えてくると、マルローが小松から情報を得た可能性は低いのではないか、と思われる。

3) 書物からの情報

では、書物からの情報について考えてみよう。この点に関しては、彼自身が 1931 年の訪日の際に触れているので、見てみよう。

自分は今迄日本の文化に就いて書かれた多くの書物を読んだけれども大抵それ等の著述はフジヤマとサクラとゲイシャでこさえた絵葉書的日本の見聞記であった。でなければ寓話と伝説でできたものであるか、若しくは自己陶醉に烈しい西洋人の癖からして、小さな主観やユーモアで書かれたものであった。『お菊さん』を書いたピエール・ロチ、『日本海々戦』のクロード・ファレル、『野遊び』を書いたトマロッカ、鎌倉の大仏を日本一の芸術と称した所謂世界的文豪ブラスコ・イバニエスに到るまで、みんな表面的の日本に各自の独断を下しているに過ぎない。³⁰(原文ママ)

ここに挙げられているのは、スペイン人であるイバニエスを除けば、19 世紀末から 1920 年代にかけてフランスで出版された、いわゆるジャポニスム小説である。ピエール・ロチ(Pierre LOTI)の『お菊さん』(*Madame Chrysanthème*)は、1888 年に初版が出版されたのち、1930 年代になっても版を重ね、戯曲化もされており、大変に人気を博した作品である。先述の『ル・ロベール』(1966)の「サムライ」の項で使用

例として引用されていることから見て分かるように、当時のフランス人には馴染みのある作品であった。マルローは、晩年になって執筆した『回想録』(プレイヤード版 1976)でも、この作品に言及している³¹。ロチの作品には他に、『お梅が三度目の春』が、やはり版を重ねている。

クロード・ファレール(Claude FARRERE)の『日本海々戦』(*La Bataille* 『戦闘』)は、日露戦争を題材に当時の日本と大名家出身の海軍将校と妻を描いた小説で、ミリオンセラーとなった。初版は1909年であるが、1930年代までにやはり何回も版を重ね、戯曲化もされ、さらに映画化も3回(1924、33、34年)されている。この作品も、『ル・ロベール』で「ハラキリ」の項に引用されていることからわかるように、大変多くの人々に親しまれた作品である。マルローは、『回想録』(プレイヤード版 1976)のなかで、この作品の名は記していないが、「対馬」という表現で日露戦争に言及している³²。

20年代から30年代にフランスで出版された日本を扱った文学作品を見てみると³³、ロチの『お梅が三度目の春』を加えたこの3冊の占める割合が圧倒的に高い。他には、上で触れたキク・ヤマタの『マサコ』や静御前を扱った『シズカ: 静御前』などが目を引く。また、この時期、ポール・クローデルの、先に挙げた『朝日の中の黒い鳥』と『百扇帖』も出版されている。それ以外は、マルローが例に挙げたトマ・ロカ(Thomas RAUCAT)の『野遊び』(*L'Honorable partie de la campagne* 『御遠足』)、あるいは題名のみを挙げるなら『ミカドの伝言: 帝国に敵対する少女』『愛のムスメ』『日本人の双子』『日本人女性』『日本での15分』『日本での数時間』などがならぶ。

このような出版状況を見れば、マルローが例としてロチの『お菊さん』やファレールの『戦闘』、ロカの『御遠足』を挙げているのは、当然のことといえる。日本を扱った小説では、当時、最もポピュラーな作品だったからである。イバニエスも、第一次世界大戦やアメリカを題材とした作品で当時有名であり、『血と砂』など映画化された作品もある。また、彼が挙げた作家は皆、日本に滞在した経験があり、情報としての信ぴょう性もあると言えるだろう。さらに付け加えれば、ロチとファレールは、フランス文壇の最高権威であるアカデミー・フランセーズの会員でもある。

内容から見た場合、上に挙げた最後の6点に関しては、「絵葉書的日本の見聞記」や「小さな主観やユーモアで書かれたもの」の類に入るだろう。そのほか、トマ・ロカの作品は、日本に滞在中のスイス人が日本の娘を江の島に誘うことから生じる様々な波紋を、関係するいろいろな人物の視点で描くというものである。1924年に初版が出版され、やはり版を重ね、1944年になっても出版されている。ロチの作品は、彼が日本に滞在した際の、いわゆる現地妻「お菊さん」との生活をもとに描かれたものである。そこでは日本と日本人は、ロチのフランス人としての目を通して、きわめて主観的に描かれている。どちらの作品も、マルローからすれば、上記6点と同じ範疇に入る。したがって、これらの作品には、武士道に関連する記述は存在しない。

「寓話と伝説でできたもの」としては、やはり、ラフカディオ・ハーンが考えられる。ハーンの作品はフランスでは、1920年代から30年代にかけて集中的に翻訳が出版されている。彼の作品の影響は大きく、フランスの本格的な日本学の創始者のひとりであるモイーズ＝シャルル・アグノエルは、1924年に「これまで我々が日本を知るすべは、非常に見事ではあるが部分的に時代遅れの書物(ラフカディオ・ハーン)や、言語道断の誤謬に満ちた話(日本は「芸者の国」)、あるいは明らかに共感に欠ける小説(『キモノ』)に限られていた」と述べている³⁴。クローデルの作品は、能や歌舞伎などの日本文化に関して記して

いるが、武士道についての記述はない。したがって、「武士道」に関連する作品は、フェレールの『戦闘』だろう。この作品については、すでに少し触れたが、もう少し詳しく見ておこう。

『戦闘』は、日露戦争を題材にしたものだが、それだけではなく、幕末の歴史についても記されている。すなわち、登場人物が長州と薩摩の大名家出身の海軍将校たちとその妻であり、幕末のそれぞれの状況や立場が記され、明治維新を経て西洋化した彼らの姿の内面になお生き続ける、古い日本人が描かれる。維新前の大名の女性の生活についても語られる。さらに、この作品には日本語も多く使用され、「武士道」という語も用いられている³⁵。また、登場人物の一人は、船上で古式に則り、割腹自殺を遂げる。1909年が初版であるが、先にも述べたように1930年代になっても版を重ね、日本のイメージとして日露戦争と「ハラキリ」を、一般の人々に定着させることに大きく貢献したと思われる。だが、『戦闘』には、日本に関するステレオタイプ的なイメージが満載されているが、その精神性については、記されているとは言えない。というのも、将校の船上での切腹の理由が不明なうえに、著者自身が、「ヨーロッパ人の目によりわかりやすくするために」主要登場人物の特徴を選び構成したとし、切腹についても、「実際には、1905年5月27日の輝かしい勝利の晩に自らの腹を切り開いた海軍将校はいない」と記しているからである³⁶。

また、文学作品ではないが、1931年には先述のキク・ヤマタによる『乃木将軍の生涯』が1月1日に出版されている。「サムライ精神」を体現する乃木の生涯を扱ったこの作品は、彼に情報をもたらさなかったのだろうか？ この作品は、ヤマタ本人が日本で収集した情報をもとに執筆した。しかし、彼女は本来、女性を主人公とする小説を中心とする。したがって、日露戦争の英雄であり、かつ、殉死を遂げた乃木の内面や、彼の人格および精神、さらにそれらを育んだ教育・環境についての、深い記述は見いだせない。

マルローは、フェレールの作品も含めて、これらの作品について、「みんな表面的の日本に各自の独断を下しているに過ぎない。(原文ママ、以下同様)」とし、次のように語っている。

私は彼等よりは少しばかり内部的な日本に触れようと努力する積りではある。その為には出来るだけ西洋人としての意識を離れて、日本人の思想や感覚の世界を眺めて見たい。³⁷

このように述べる以上、「内部的な日本」についてマルローには、何らかの基準となる知識があったはずである。それを上に挙げたもの以外の書物から得ていたと考えられる。それを考えてみよう。

1920年代から30年代といえ、新渡戸稲造の『武士道』がまさにフランスで翻訳出版された時期である。アメリカでの初版は1899年だが、フランス語訳の出版は1927年と遅い。しかし、研究者は英語版をすでに自らの研究に生かしている。先に、1912年の乃木希典の割腹自殺に関する新聞報道について述べたが、その中で引用されている研究者ラ・マズリエールの解説は、彼の著作『日本：歴史と文明 第2巻：封建制の日本』での説明部分である³⁸。ラ・マズリエールは当時の日本史研究の第一人者であり、新渡戸の『武士道』の中でも引用されているが、1905年にパリ日佛協会で「武士道」という講演を行い、その講演録が同年に出版されている³⁹。また、1907年に執筆した『日本：歴史と文明 第2巻：封建制の日本』のなかで詳しく武士道について説明をし、さらに、『日本：歴史と文明 第3巻：徳川家の日本』に、

「武士道」と題した章を入れている。講演録にも『日本：歴史と文明』にも参考文献として、新渡戸稲造が挙げられている。また、新渡戸の『武士道』出版以前にラ・マズリエールが書いた『日本史論』(1899)の中では「武士道」という語は使用されていない。したがって、この用語はフランスでは、新渡戸の『武士道』で使用されたのを受けて、用いられるようになったといえる。さらに、フランスにおいて新渡戸稲造の『武士道』が翻訳出版されるのは 1927 年であるが、それ以前に「武士道」の語と内容は、ラ・マズリエールによって、フランスでは紹介されるようになっていた、とすることができるだろう。

新渡戸稲造の『武士道』は欧米人に親しみのある作家や作品の登場人物、哲学者などの言葉を例として豊富に挙げて説明しているが、かなり煩雑な印象を与えている。一方、ラ・マズリエールの「武士道」の説明の特徴として、新渡戸の『武士道』をフランス人的な視点から整理し、また、彼なりの事例や解説などを入れながら、ニーチェなど当時の思想家との比較を交えて説明をしている点を挙げることができる。したがって、新渡戸稲造の『武士道』にくらべ、こちらのほうがフランス人にとってはるかに理解しやすい内容となっており、部分的には独自の見解となっている。

『日本：歴史と文明』は、8 巻に及ぶ大作であり、最終巻は 1923 年に出版されている。武士道についての記述がある第 2 巻と 3 巻は、1907 年の出版であるが、最終巻の出版年を考えるならば、1920 年代・30 年代に参照することは十分あり得ただろう。また、過去に出版された書籍が多く流通していたフランスの事情や、マルローが図書館を若い頃から頻繁に利用していた⁴⁰ことなどを考え合わせるならば、1905 年の講演録も含め、ラ・マズリエールの著作を参照した可能性はかなり高いと言える。内容構成から見た場合、ラ・マズリエールの双方の著作は武士道に関する内容はほぼ同じであるが、1905 年の講演録は、武士道のみを扱っているため、『日本：歴史と文明』での記述がまとめられ、コンパクトでわかりやすくなっている。

4. 新渡戸稲造の『武士道』との関連

それでは、マルローの考える「武士道」と新渡戸稲造の『武士道』に関連はあるのだろうか。新渡戸稲造の著作に加え、その影響を受けたラ・マズリエールの著作とマルローの「武士道」を簡単に比較検討してみよう。

マルローは 1960 年に来日した際、武士道を次のように表現している。

《武士道》とは、中世日本においては、フランス中世の《騎士道》の誓約と同様なのである。では《騎士道》とは何か。それは二重の誓約である。一つは二人の人間の間における忠義、あるいは忠誠の誓約である。次に、第二の誓約とは、人間を超えた一つの超越的価値となるようなものである。超越的価値とは、フランスの騎士道においては、キリスト教世界であった。騎士はかつてはキリストの兵士であったのだ。騎士の宣誓において、人間の誓約は、一方で、神との誓約があり、バランスがとれていた。《武士道》においては、超越的価値とは、日本の愛国心である。⁴¹

また、1974 年には、「武士道の神話。それは《忠誠》と《勇気》と人間の《超越性》の総和を言いあらわすものにほかならない。⁴²」と述べ、武士道の精神を、「(下に人、上に天)の天と人とのあいだの永遠なる

対話」とも表現している⁴³。

マルローのこの武士道観と新渡戸稲造のものとを比較する前に、大前提として、マルローが、中世日本の武士道と中世フランスの騎士道をほぼ同じである、と考えている点を考えてみたい。新渡戸は、第1章の冒頭、武士道を騎士道を表す「chivalry」で訳した後、それが「乱暴」であるとして、両者が異なることを説明し、用語も「chivalry」ではなく「武士道」を使用するとしている⁴⁴。一方、ラ・マズリエールは、この後に示す引用例からもわかるように、武士道を、騎士道を表す語「chevalerie」を用いて説明している。この点については、着目する必要があるだろう。

では、内容についての比較に入ろう。新渡戸の著作に上記に関連した内容として、次のような一節がある。

武士道では、国家は個人に先立って存在し、個人は国家の構成要素ないしは分子としてその中に生まれてきた、と考えられた。そのため個人は、国家のため、もしくはその正当な権威を掌握するもののために生き、また死なねばならなかった。⁴⁵

ラ・マズリエールも見てみよう。彼は、天皇がアマテラスすなわち神の子孫であることを随所で示しながら、次のように記している。

騎士道のモラルは、第一の義務としてセツギ[節義]すなわち忠誠、ダイミヨウ[大名、『日本：歴史と文明』では「長」と記されている]への献身を強いていた。(中略)この献身は、兵士の士官への消極的服従、士官の将軍への消極的服従、そして、熱狂的な孝心の性質を有している。(中略)高貴なる者は、君主をいさめることが義務であると率直に言って信じており、このような大胆な行動を自らの死をもって正当化するのであった。長の墓の上で、その家来の大半はあの世で彼につき従うために自らの命を絶った。この供犠はジュンシ[殉死]あるいはオトモバラ[お供腹]と呼ばれていた。(中略)セツギ[節義]がサムライの第一の義務を形成しているとするならば、名誉は第二の義務を形成している。武士たる者は、その勇気によって注目されることが義務付けられていた。⁴⁶

この一節は明らかに武士道についてものだが、「騎士道」と記している点は先に指摘した通りである。さて、新渡戸とラ・マズリエールの説明を比較してみると、後者のほうが、詳しく説明されており、わかりやすくなっている。さらに、武士道において、超越的存在としての「長」への忠誠に加え、勇気と名誉の重要性、また、〈天〉である「長」との対話という考えや、国を代表する「長」への孝心が愛国心に達する、という考えを導きやすい記述となっており、マルローのイメージする「武士道」との類似性を見ることが出来る。新渡戸の『武士道』でも、ラ・マズリエールがここに記している内容は説明されてはいるが、一つの文脈の中ではなく、分散している。したがって、全体としてのイメージはつかみにくくなってしまっている。

次に、マルローは、先にも引用したが、武士道に関連し、「だれもが、そこでは、子供のころから、自分の自害すべき瞬間を選ばなければならないと知っているような文明⁴⁷」という表現をしている。この点につ

いては、新渡戸とラ・マズリエールは、挙げている逸話や例は異なるものの、ほぼ同様の内容を記している。具体的には、前者は、歌舞伎の『菅原伝授手習鑑』等を挙げ⁴⁸、ラ・マズリエールは室鳩巢の友人の14歳の息子の話を例に挙げている。加えて、子どもの頃から炎天下を走り、雪の上を裸足で歩くなどの、肉体的な苦痛に動じない鍛錬や、切腹や介錯のまねをして遊び、死を目にしても動じない心を養う鍛錬についても述べている⁴⁹。これは、新渡戸にも類似の例が挙げられている⁵⁰が、切腹や介錯のまねをして遊んだ、というのはラ・マズリエールが加えている部分である。

さらに、マルローのニーチェへの傾倒を先に述べたが、『武士道』では、ニーチェは関連づけられているのだろうか。新渡戸がニーチェに言及している部分が、一箇所だけある。そこを見てみよう。

ニーチェの尊大で自己中心的ないわゆる「主人道徳」は、ある意味では武士道に近い。しかし、(中略)ニーチェが例の病的な歪曲をして、ナザレ人[キリスト]の謙遜で自己否定的な奴隷道徳と呼んだものに対する、一つの過渡的な現象、あるいは一時的反動なのである。⁵¹

ラ・マズリエールもニーチェに言及している。こちらは、3箇所ある。

武士道が仏教に負っているものは、その精神性、すなわち魂の状態である。ニーチェは、精神と性格のこの継続的な緊張について語っている。この緊張はキリスト教がヨーロッパ人の中に創り出したものであり、この緊張のみが、ヨーロッパ人に偉大なことを行わせる原動力となるのである。(略)天、地獄、仏、ニルヴァーナ、あるいは涅槃のドグマが、武士にあの良心の咎めによる不安を与えたのだ。この良心の咎めによる不安とは、ニーチェが自分自身に対する残酷と呼んだものである。⁵²

自己修養の重要性にもかかわらず、武士道には自己中心的なモラルすなわち、ニーチェ的なモラルの要素は全くない。自己修養するのは、他者への義務を全うできるようになるため、自分自身を忘却する術を身に着けるためである。⁵³

最後の一節は、新渡戸が述べている部分に相当する。しかし、この部分にとどまらず、双方のニーチェとの関連部分を見てみると、ラ・マズリエールの解説のほうが、ニーチェの思想との類似性および相違を示しており、ヨーロッパ人にとっては理解しやすい。また、新渡戸の著作には見られない特徴として、武士道における仏教の影響に関連させて、ニーチェとの類似性を記述しているという点がある。マルローは、晩年、『反回想録』(プレイヤード版)の中の日本に関する部分で、同じようにニーチェと仏教を関連付けており⁵⁴、ここに発想の近さを見ることが可能である。

このように見てくると、マルローがイメージする「武士道」は、新渡戸やラ・マズリエールが描く「武士道」に近いということがわかる。ただ、新渡戸稲造の『武士道』は、先にも述べたが、煩雑である上に、基本的な説明が十分ではなく、外国人向けに執筆されたとはいうものの、わかりにくい部分もある。一方、ラ・マズリエールは基本的な説明も加えながら、フランス人に理解しやすいように整理し、詳しく説明している。

ここにすべてを記すことはできないが、著作の中には、新渡戸が引用しているものとは異なるが、多くの逸話が盛り込まれており、フランス人にとって「武士道」をイメージしやすい内容となっている。加えて、マルローが強い関心を抱いているニーチェとの関連性についても言及されている。さらに、マルローは藤原隆信筆とされる「伝・平重盛像」を賞賛しているが、この絵画を実際に目にする前は、武士道を体現するものとして「源頼朝像」を賞賛していた⁵⁵。ラ・マズリエールの著作は、源氏を武士の起源であるとともに、天皇家の血を引く存在としてとりわけ強調している⁵⁶、という特徴もある。したがって、マルローの「武士道」は新渡戸稲造の『武士道』に影響を受けているということが出来るが、情報源としては、ラ・マズリエールの著作を読んでいる可能性が高いと言えるのではないだろうか。

5. おわりに

20 世紀のフランスを代表する作家の一人であるアンドレ・マルローが、なぜ「武士道」に強く惹かれたのか。その背景には、第一に、当時の思想状況が大きく関係していることが上記の考察から明らかとなった。すなわち、第一次世界大戦などによって生じた悲惨な状況を目にし、「神」の救済に対して懐疑的にならざるを得ない、という現実があったのである。そしてそこから、人間にとって不可避な「死」という問題が再度ヨーロッパの人々の前に立ち現れた。

さらに、背景として、1920 年代から 1930 年代のフランスにおける日本のイメージがある。19 世紀末からジャポニズムが流行していたが、その中に「ハラキリ」「サムライ」というイメージも存在していた。日露戦争を題材にした小説がベストセラーになるなど、文学もこのイメージを一般に広めるのに貢献していた。そのような中で、1912 年に起きた日露戦争の英雄乃木希典の割腹自殺は、フランスにおいて大きな衝撃を与え、そのイメージを揺るぎないものにしたと言える。新渡戸稲造の『武士道』が 1899 年にアメリカで出版されており、フランス語訳の出版は遅かったものの、この著作を参照したフランス人研究者による解説もこの出来事の報道に使用され、乃木は武士道を体現する存在として認識されたのである。

このような社会状況の中で、マルローは、日本に特有の死の流儀すなわち切腹と、それを生み出した武士道に関心を抱いたのである。彼が抱く武士道のイメージは、そのような社会的文脈の中にある。したがって、当時フランスで流行していた小説は、彼の目から見れば、日本の本質を示すものではなかった。

それでは、彼はその知識をどこから得たのか。この点については、その特徴、および当時入手可能だった情報を考察するならば、新渡戸稲造の『武士道』の影響を受けているということは、ほぼ確実であるだろう。しかし、内容から考えるならば、新渡戸の『武士道』を取り入れ、その用語とともに内容をフランス人向けに説明したラ・マズリエールの著作のほうが、その類似点から見て影響が大きいと言えるだろう。

本稿において筆者が示したのは、アンドレ・マルローという一人の作家が武士道に関心を抱いた背景、当時の社会での認識、情報の実態と入手方法である。しかし、この作業によって明らかとなったことは、一人マルローにとどまらず、武士道という日本文化の一面が、フランスにおいてどのように捉えられ、また、どのように広まったのかという経緯の一端を示すものでもある、とすることができるのではないだろうか。

【註】

- 1 André MALRAUX, *La Condition humaine in Romans*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1978, p.539. 訳出にあたっては、『人間の条件』(小松清・新庄嘉章訳、新潮文庫、1978)を参照させていただいた。
- 2 André MALRAUX, *Les Conquistadors in Romans*, *op. cit.*, 1978, p.19.
- 3 *Ibid.*, p.114.
- 4 小松清「人間マルロオ」、A.C.F(フランス文化友の会)編『アンドレ・マルロオ』現代作家フランス叢書II、新樹社、1951、p.198. 引用にあたり、旧仮名遣いを新仮名遣いに改めさせていただいた。小松清からの引用に関しては、以下同様である。
- 5 同上、p.199.
- 6 同上、p.200.
- 7 同上、pp.226-227.
- 8 堀田郷弘「東京日仏会館開館式におけるマルロー氏の演説(1960年2月22日)と東京羽田空港におけるインタビュー(2月29日)」『城西人文研究5』、1978、p.136(フランス語原文の筆者による拙訳)。
- 9 竹本忠雄『アンドレ・マルロー日本への証言』、美術公論社、1978、p.228. 竹本忠雄『マルローとの対話:日本美の再発見』、人文書院、1996、pp.98-99においても同様の内容が記されている。
- 10 André MALRAUX, *La Tête d'obsidienne*, Gallimard, 1974, p.196. および、*L'Intemporel*, Gallimard, 1976, p.206.
- 11 1909年に祖父の死(自殺とも言われている)、1930年に父のガス自殺を体験している。
- 12 小松清「人間マルロオ」、前掲書、p.199.
- 13 同上、pp.201-202.
- 14 André MALRAUX, 〈D'une jeunesse européenne〉 in *Ecrits*, Grasset, 1927.
- 15 *La Condition humaine*, *op. cit.*, p.360.
- 16 最初の妻クララは、21歳の頃のマルローの様子を回想しながら、次のように記している。「[彼は]もちろんニーチェに取り憑かれていたが、それは、私たちが知り合う前でもそうだったのだ。」(Clara MALRAUX, *Le Bruit de nos pas*, Grasset, 1992, p.197)
- 17 Cf. André MALRAUX, *L'Homme précaire et la littérature*, Gallimard, 1977, pp.195, 204.
- 18 晩年に記した『反回想録』の中で、マルローは次のように回想している。「私の世代のすべての作家と同様に、私は、『カラマーゾフの兄弟』の次の一節に衝撃を受けたのだった。その中で、イワンはこう語っている。「けだもののような者から罪のない子どもが責苦を受けることが、神のご意志に含まれるのなら、わたしは、[天国への]切符をお返しする。」」(*Antimémoires in Le Miroir des limbes*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1976, p.483.)
- 19 小松清は、この点に関して次のように記している。「昨年の夏、マルロオに会って暫く彼と一緒に暮らしたハアコン・シュヴァリエも、彼ほど自分の生活を口にしないものはない、彼の親しい友人にとってさえ彼の生活は一つの神話であると言っている。マルロオと私とはあちらでは、しばしば会っていた関係にあったし、ことに1931年の秋は二週間あまりも日本の旅をともにした親しい関係であるのに、ただ一度だって私は彼から過去について聞いたことはなかった。」(小松清「アンドレ・マルロオと行動の文学」『セルパン』第44号、第一書房、1943年10月、p.25)
- 20 横浜開港資料館編『『イリュストラシオン』日本関係記事集』第1巻:1843-1880(1986)、第2巻:1881-1903(1988)、第3巻:1904-1905(1991)、横浜開港資料館、を参照した。
- 21 たとえば、1875年3月6日号「ヒョットコ」(第19章)、1895年11月16号「現代の日本:スダレの陰」などを参照されたい。
- 22 Kikou YAMATA, *La Vie du général Nogi*, Gallimard, 1931, pp.203, 206.
- 23 クララ・マルローは、1920年代のマルローを含む若者世代にとっての文学・芸術状況について、次のように記している。「私たち若者の世界には、クローデルとジッド、モランとジロドゥ、ピカソ、グリとシャガールがいた。」(Clara MALRAUX, *Le Bruit de nos pas*, *op. cit.*, p.207)
- 24 『アンドレ・マルロー全集I』(プレイヤード文庫)に掲載されたフランソワ・トレクール編集の年譜を参

照した。François TRECOURT, 〈Chronologie〉 in André MALRAUX, *Œuvres complètes I*, Gallimard, Bibliothèque de la pléiade, 1989.

25 Cf. Clara MALRAUX, *Le Bruit de nos pas*, *op. cit.*, p.197.

26 Cf. Paul CLAUDEL, *Journal Tome I:1904-1932, Journal Tome II:1933-55*, Gallimard, Bibliothèque de la pléiade, 1968.マルローの名は、第2巻738ページ(1951年7月11日の記述)に記載されている。

27 小松清「人間マルロオ」、前掲書、p.201.

28 小松清「マルロオと日本」『人間の条件』、三笠書房、1951年、p.303.

29 小松清「人間マルロオ」、前掲書、p.228.

30 小松清「アンドレ・マルロオ」『新日本美術』、1933年6月創刊号。(林俊『アンドレ・マルロオの「日本」』、前掲書、p.39からの引用による。)

31 André MALRAUX, *Antimémoires* in *Le Miroir des limbes*, *op. cit.*, p. 470.

32 *Ibid.*

33 Patrick BEILLEVAIRE, *Le Japon en langue française : ouvrages et articles publiés de 1850 à 1945*, Editions Kimé, 1993.

34 モイーズ＝シャルル・アグノエル「太平洋における紛争、中国内戦と日本の政治の現在の傾向」『日本と極東』n°11-12, 1924, p.383. (クリストフ・マルケ「雑誌『Japon et Extrême-Orient/日本と極東』と1920年代フランスにおける日本学の萌芽」『日仏文化』n°83, Jan. 2014, p.87からの引用。)

35 Claude FARRERE, *La Bataille: roman*, Ernest Flammarion, c1921, pp.35, 214.「武士道すなわち名誉に関する我々の古い規範」「武士道を忠実に守ってきた両家」という表現が用いられている。

36 *Ibid.*, pp.X-XI.

37 小松清「アンドレ・マルロオ」、前掲書。(林俊『アンドレ・マルロオの「日本」』、前掲書、p.39からの引用による。)

38 Marquis de la MAZELIERE (Antoine Rous), *Le Japon : histoire et civilisation, Tome II : Le Japon féodal*, Plon-Nourrit, 1907, pp. 25-31.

39 Marquis de la MAZELIERE (Antoine Rous), *Le Bushido : Conférence faite à la Société Franco-Japonaise le 1^{er} Avril 1905*, Imprimerie de la Cour d'Appel, 1905.

40 マルローの図書館や古本屋(ブキニスト)通いについては、『アンドレ・マルロー全集 I』(プレイヤード文庫)に付されたフランソワ・トレクール編集の年譜に詳しい。François TRECOURT, 〈Chronologie〉 in André MALRAUX, *Œuvres complètes I*, *op. cit.*

41 堀田郷弘「東京日仏会館開館式におけるマルロー氏の演説(1960年2月22日)と東京羽田空港におけるインタビュー(2月29日)」、前掲書、pp.141-142(フランス語原文の筆者による拙訳)。

42 竹本忠雄『アンドレ・マルロー日本への証言』、前掲書、p.63.

43 竹本忠雄「日本文明の中の垂直軸」『芸術新潮』、1974年7月号、p.33.

44 新渡戸稲造『現代語訳 武士道』(山本博文訳)、筑摩書房、2010、第1章。

45 同上、pp.102-103.

46 Marquis de la MAZELIERE, *Le Bushido*, *op. cit.*, pp.8-9. Cf. Marquis de la MAZELIERE, *Le Japon : histoire et civilisation, Tome II: Le Japon féodal*, *op. cit.*, pp.27-29. 両者の説明は、表現が多少異なっている。以下同様である。

47 竹本忠雄『アンドレ・マルロー日本への証言』、前掲書、p.228.

48 新渡戸稲造『現代語訳 武士道』、前掲書、pp.134-135.

49 Marquis de la MAZELIERE, *Le Bushido*, *op. cit.*, p.19. Cf. *Le Japon : histoire et civilisation, Tome III: Le Japon des Tokugawa*, Plon-Nourrit, 1907, p.314.

50 新渡戸稲造『現代語訳 武士道』、前掲書、p.46.

51 同上、p.196.

52 Marquis de la MAZELIERE, *Le Bushido*, *op. cit.*, pp.15-16. Cf. *Le Japon : histoire et civilisation, Tome III: Le Japon des Tokugawa*, *op. cit.*, pp.307-308.

53 Marquis de la MAZELIERE, *Le Bushido*, *op. cit.*, p.24. Cf. *Le Japon : histoire et civilisation, Tome III: Le Japon des Tokugawa*, *op. cit.*, p.320.

54 「ニーチェは諸価値の変成を望んでいる。諸価値とは無視できる目標なのだ。というのも、諸価値は過ぎゆくもの、すなわちマヤに属しているからである。厳格な仏教とは至高価値の名の下に、諸価値を

再検討することなのである。至高価値とは、まれにしか訪れない伝達不可能な精神状態、すなわち〈天啓〉によってしか達し得ない以上、信仰の対象なのである。」(André MALRAUX, *Antimémoires in Le Miroir des limbes*, *op. cit.*, p.471.)

⁵⁵ マルローから小松清氏への書簡 1951年1月25日付け、小松妙子氏所蔵。(林俊『アンドレ・マルローの「日本」』、前掲書、p.275.)

⁵⁶ Cf. Marquis de la MAZELIERE, *Le Bushido*, *op. cit.*, p.12. Marquis de la MAZELIERE, *Le Japon : histoire et civilisation*, Tome II: *Le Japon féodal*, *op. cit.*, p.32.